

聖書、万葉、ディラン

菱川 英一

神戸大学を2019年3月31日に退職しました。会議等がなくなりましたので、少しは我に返る時間が持てております。あまり我に返ると己の能力の乏しさに絶望しますので、ほどほどに我に返っております。

相も変わらず詩文などを読んで、あれこれ考えるうちに、翻訳について改めて考えるようになりました。一度定訳のようなものがあればそれで十分ではないかと以前は考えていたのですが、少し考えが変わりました。きっかけは2018年12月に出版された『聖書 聖書協会共同訳』です。日本聖書協会からの聖書としておよそ30年ぶりの新訳です。

この聖書を読んで、なぜ新たな翻訳が必要なのか、考えさせられるところがありました。翻訳理論としてスコプス理論を採入れた画期的な翻訳ということもあるのですが、私が最も印象に残ったのは、翻訳を担当した人々の生の声でした。

この聖書は原語担当者と日本語担当者がチームを組み、翻訳の当初の段階から共同作業をして原稿を作る方式がとられました。日本語担当者のなかには先年まで神戸大学に在籍された高梨先生もおられます。

原語担当者のひとり石川立氏が「原文に戻り、訳を検査しながら翻訳し直すことで聖書」を耕すという趣旨のことを述

べられています。〈読みならされ固くなってしまった翻訳の表面の土を耕し、土に空気を入れ、土を柔らかくし、豊かな土壌〉にすることが、聖書の新たな翻訳の意味であると。

この石川氏の発言にふれたのは元号が令和に変わって間もないころでした。たまたま、近年は万葉集の英訳を教えたこともあって、新元号の典拠となった万葉集の英訳のことを考えていました。これまでは日本学術振興会の英訳を定訳のように考えていたのですが、改元初日の2019年5月1日の朝日新聞にピーター・マクミラン氏による巻5.822の歌の新訳が載りました。欧米にはない梅と雪の見立てを新鮮な比喻と感じた旨が記されていました。

こうした新訳を立続けに見るに及び、自分が取組んできたボブ・ディランの詩の解釈にあたって、これまでの定訳(片桐コズル訳、中川五郎訳)で満足してはいけなかつたの思いにかられるようになりました。といっても、現代の詩人のなかでは最もさかんに研究が進んでいる詩人なので、参照すべき研究は膨大なものです。しかも多くの分野・領域にわたります。そこで、今は、ノーベル文学賞の委員会がやったのと同じ作業、つまり、詩集を地道に通読するという作業を続けています。

神戸大学名誉教授(英米文学 2019年3月退職)

クラブに棲む日々—中東欧地域との連携—

油井 清光

2019年3月に退職しましたが、グローバル人文学(現代日本プログラム)の授業や中東欧との研究・教育連携のことで、相変わらず人文学研究科にお世話になっています。4月半ばから2か月間の予定で、ここクラブのヤグウォ大学で集中講義を行っています。中東欧の研究・教育機関としては、ヤグウォ大だけでなく、ブダペストのエトベシ・ロランド(ELTE)大学、ブダペスト商業大学、ブラハのカレル大学、ルーマニアのパベシ・ポヨイ大学、ベオグラード大学(バルカン地域ですが)、ワルシャワ大学、スロヴァキアのコメニウス大学などとの連携が、それぞれに発展しているところです。

中でもヤグウォ大との連携が年季の入っていることはご存じの通りで、相互のレクチャー・シリーズやエラスムス事業で交流があり、神戸大学の授業にも、何人もの先生に来ていただいています。ヤグウォ大とパベシ・ポヨイ大には、神戸大学のオフィスもあります。後者の大学にオフィスを構えることになった先方の立役者は、I.A.ニストル教授で、前回のこの欄で、大津留先生が紹介されていたルーマニア人と奇しくも同じ名前です(ルーマニア人としてそれほど珍しい名前ではないのかもしれませんが)。

ヴィシエグラード4か国という表現があります。ハンガリー、ポーランド、チェコ、スロヴァキアの4国です。このV4諸国で独自の基金を有しており、今年3月まで、同基金から資金を得て、現代日本プログラムの授業の一部を運営していました。これを基盤として次の資金を申請しています。ブダペストには国際交流基

金の日本文化センターがあり、中東欧地域全体を管轄されています。学生のインターンシップもお願いしています。その多田所長には、何度も人文学研究科で講演していただいているところです。例えば、ELTE大学とは本格的な交流が始まったばかりで、今後ますます発展してほしいものと願っています。

16年前にも、クラブに計2か月ほど滞在し集中講義に従いましたが、同大学とはもっと以前の、研究者として駆け出しの頃からの縁です。どうやら私はこの街と大学がかなり好きなようです。しかし国際関係の部門にいたときにいちばん難しかったことは、自分にたまたまコネがあり好きだったりすることに対して、大学全体の客観的な利益をどう切り分けるかでした。コネがあるので何かの事業に展開できる、ということと、外から「国際部の私物化」と見えることとはおそらく表裏一体なのでしょう。きっとそう見えていたに違いないという反省と、そうでないことを示したいという気持ちが錯綜するクラブに棲む日々です。

ジョゼフ・コンラッドが、ロシア領時代のウクライナに、ポーランド人を父母として生まれた多言語話者であったことはつと知られていますが、彼はクラブにも特別な思い入れがあったようです。「クラブは、私が父とその生涯の最後の18か月間を過ごした街だ。私が子どもでもあることを止め、少年となり、その年頃らしい友情や野心、思想や憤りを知ったのは、この古き王都、学問の街においてであった」(Notes on life and letters)。

神戸大学名誉教授(社会学 2019年3月退職)

神戸大学

文学部だより



市民社会の基礎学を担う文学部 — 創立70周年、新たな挑戦 —

文学部長・人文学研究科長 奥村 弘

敗戦後、新たな市民社会形成が求められる中で、私たちの先輩たちは、基礎的な学問の探求とそれを通じて養われる科学的精神の育成こそが、日本社会が世界的な文化水準に達するために必要であるとの理念を掲げ、人文学の社会的役割を強く主張し、文学部の前身である文理大学の文科を立ち上げました。

創立以来、この理念を大切にしながら、教職員や学生のみならずの学問的な探求が持続的に続けられ、本年70周年を迎えることができました。基礎科学の社会的役割が必ずしも重視されない昨今の風潮の中で、文学部を持続的に発展させることができたことについて、文学部を支えていただいた関係者の皆様に感謝いたします。

現代社会の中で、この理念は更に深められ、その重要性を増しています。国連は、2015年に持続可能な開発目標(SDGs)を具体的な行動指針として設定し、その中で、「人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」ことを2030年までの具体的な目標として設定しています。このような文化に関わる課題への対応は、まさに人文学が社会に対して担う本質的な役割であり、SDGsの設定は、それが国際的に共有されていることを示すものでもあります。

このような現代社会の動向を踏まえ、70周年を契機に、人文学の教育研究のための新たな視座を得るため、70周年記念の連続企画を進めています。「表現手段としてのマンガ」の持つ多様な役割をテーマとした3月のキックオフ国際シンポジウム『「MANGA」—人文学研究の新展開—』を皮切りに、7月6日

7日に、神戸大学・北京外国語大学との共同シンポジウム「中国・日本・東アジア1989～2019 —〈平成〉の内と外—」を開催、11月9日10日には、北京大学・復旦大学との国際シンポジウム、来年はじめにかけては阪神・淡路大震災25年を迎える中で、災害と文化に関わる多様な企画を予定しています。また各研究領域においても全国レベルの研究集会を次々と展開してまいります。さらに夏以降、神戸新聞紙上で、本学部の教員による大型連載「21世紀の人文学」を開始いたします。これらの企画の多くは皆様に広く開かれたものとなっています。御参加のほど、よろしくお願いいたします。なお詳細は文学部のホームページを御覧ください。

またそのための物的基盤を豊かにするために「神戸大学文学部・大学院人文学研究科創立70周年記念事業募金」を進めております。学生により良い学びの場を提供するために、人文学の基礎となる図書・資料等の充実をはかることと、本学部・研究科で培われた人文学の知を社会に発信していくための書籍出版助成を進めることを目的としたものです。大学の教育研究環境が全体として困難になる中で、これにつきましても、御支援、御協力のほど、よろしくお願いいたします。

CONTENTS

研究科長 挨拶	1
研究最前線	2～3
最近の著作から	4
報告	5
イベント	6
近況	7～8



地域文献史料の活用可能性の追求

木村修二 特命講師

専門は日本近世地域史研究、文献史料活用論。主な論文に「近世における大規模河川井堰の構造と変容」(『LINK【地域・大学・文化】』1、2009年)。主な著書に、『地域づくりの基礎知識1 地域歴史遺産と現代社会』(編著、神戸大学出版会、2018年)、『近世の畿内と西国』(共著、清文堂、2002年)など。

2018年10月から兵庫県三木市との連携事業を主担する特命講師となりました。もともと私は江戸時代における公家社会の家に関する研究を行っていましたが、1995年の阪神・淡路大震災後は、地域史料のレスキュー活動などに関わったことを契機に、江戸時代の地域社会に関心を向けるようになりました。当初は公家社会研究と地域社会研究を融合すべく、公家奉公をした地域社会出身の女性の研究を行ったりもしましたが、近年では近世地域社会の根幹産業である農業、とりわけかんがい水利を通じた地域社会形成の問題や、災害史にも注目して研究を進めています。

水利をめぐるのは、前近代的な水利施設の復元を、「仕様帳」(工事計画や資材の明細)や「出来形帳」(竣工報告書)といった文献史料のみで行い、従来あまり注目されてこなかった史料の活用を試みました。また、一本の用水路を分水する際にしばしば導入された分水樋(木材や石材)が地域秩序にもたらした影響についても研究を進めています。

一方、災害に関しては、比較的近い将来に発生が予測さ

れている南海トラフを震源とする巨大地震・津波について、江戸時代に発生した宝永地震(1707年)・安政地震(1854年)の直後に、地域の人々自身が書き残した多くの地震・津波経験記録を収集し、分析を進めています。この地震・津波記録は、現在、同様の被害が予想される地域(和歌山県や徳島県など)の住民自身も地域防災・減災への寄与を期待して大きな関心を寄せています。しかし江戸時代の書物にみられるいわゆるくずし字やそろり文とよばれる文体が障壁となって、現代の一般人による内容理解を妨げています。私は、これらの地震・津波記録の研究を行うとともに、現代語訳を進めることで現代の一般の人々にも読解可能な状態にし、公開してゆくことを目指しています。

今後は、本務である三木市における自治体史編纂事業における専門的立場からの関与とともに、人口減少地域・過疎地域における文献史料保存・活用の問題にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。



冷戦とは何だったのか

藤澤潤 講師

専門は冷戦史、ソ連・東欧史。主な業績として、『ソ連のコメコン政策と冷戦—エネルギー資源問題とグローバル化』東京大学出版会、2019年。『ロシア革命とソ連の世紀3 冷戦と平和共存』(共著、『東西冷戦下の経済関係—ソ連・コメコンと西欧』担当)岩波書店、2017年など。

20世紀後半は冷戦の時代でした。第二次世界大戦の終結から1991年のソ連崩壊までの約40年にわたり、アメリカとソ連はお互いを最大の敵とみなし、核兵器の照準を合わせた状態で対立を続けました。このように書くと、冷戦は軍事対立が中心だったかのように見えますが、実際には、米ソ両国は陣営の安定を維持するために、軍事のみならず政治・経済・社会・文化などの幅広い分野で同盟国との関係を強化していました。冷戦は「冷たい戦争」であると同時に、「冷たい平和」の側面も持ち合わせていたのです。私の研究課題は、ソ連と東ドイツをはじめとする東欧諸国の相互関係を分析することで、この冷戦の実態を解明することにあります。

冷戦について考察するために、ソ連など東側陣営の側から光を当てるのは、ひとつには実証研究がまだ不足しているからですが、より重要なこととして、資源・エネルギー問題など、今日の国際関係においてクローズアップされている問題が、東側陣営では早くから明確な姿をとっていたからです。

また、東側陣営はアジア・アフリカ諸国と独自のかかわりをもっていたため、20世紀後半に進んだグローバル化について考える際にも、独自の視座を提供してくれます。そこで、私は経済相互援助会議(コメコン)というソ連・東欧諸国の国際経済機関に注目し、資源・エネルギー問題などの重要問題にソ連・東欧諸国がどのように対処しようとしたかについて、中東産油国との関係にも目を配りながら検討しました。

現在は、冷戦の終焉過程についても研究を進めています。1980年代後半に、ソ連のゴルバチョフは、社会主義体制の行き詰まりを打開しようとして改革を進めましたが、これは東欧諸国に大きな衝撃をもたらしました。そもそも東欧諸国はソ連の命令に唯々諾々と従うだけの衛星国ではありませんでしたが、この時期にはソ連と東欧諸国との関係はますます多くの齟齬や対立を含んだものになりました。その実態を具体的に解明することが、現在の研究課題です。



地域を多角的に考える

井上 舞 特命助教

専門は中世日本文学、地域歴史資料の保全・活用に関する研究。主な業績として、「アメノヒボコをめぐる〈貴種流離譚〉」(『日本語学』70号、韓国日本語学会、2016)、「石川家文書を取りまく〈場〉」(『LINK: 地域・大学・文化』9号、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター、2017)などがある。

現在、私はふたつの分野の研究に取り組んでいます。ひとつは日本文学。もうひとつは地域歴史資料の保全・活用に関する研究です。これらは一見、全く異なる分野のようにみえますが、私の中でこのふたつは「地域」というキーワードで結ばれています。

学生時代の専攻は中世日本文学で、地域における歴史叙述を研究テーマにしていました。具体的には、14世紀の播磨地域をフィールドとし、南北朝期に同地で成立した『峯相記』というテキストや、寺社の縁起、説話の分析を通して、地域の歴史叙述の特質や歴史認識のあり方について研究していました。近年は、『峯相記』の研究を継続して行うとともに、考察対象を近世の地誌や近代に編纂された市町村史(誌)にまで広げ、地域の歴史叙述の受容と変容に関する研究にも取り組んでいます。

もうひとつの地域歴史資料の保全・活用に関する研究は、現在の職務と関連するものです。私が勤務する人文学研究

科地域連携センターでは、兵庫県下の各市町村や地域団体などと連携して、地域の歴史や歴史資料を保全し、地域づくりに活かしていく活動に取り組んでいます。昨今、人口減少や高齢化、災害など、様々な事情によって、地域の歴史資料は消失の危機に瀕しています。これらを守り、未来に残していくためのしていくための方法、特に地域住民が主体となって活動していける方法について実践的研究を進めています。

資料館や博物館に収蔵された資料とは異なり、地域に現存する資料について考えるということは、その資料を管理している家の方や地域の方々とも向き合うということです。地域の形は様々で、そこに住む人たちの考え方や抱える問題も様々です。研究者として、客観的に対象を観察するだけでなく、時には地域の方とともに笑い、泣き、悩み、怒りながら、日々活動しています。



日本近世在郷町の研究

加藤明恵 特命助教

専門は日本近世史。研究業績として、『幕末期伊丹郷町の治安維持と町運営』(『地域研究いたみ』43号、2014年)、『事務局資料』から振り返る史料ネットの20年間』(『ヒストリア』250号、2015年)、『石橋茂兵衛家の商科経営』(『地域研究いたみ』47号、2018年)

2018年8月に人間文化研究機構を主導機関とする「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」の担当として着任しました。卒業論文を書いて以来、村落に成立した町場である在郷町における町運営について研究しています。

江戸時代の在郷町は、特産品生産によって経済的に発展し、周辺地域の生産・流通の結節点として機能しました。そのため、町の趨勢は近世を通じて経済・社会変動により大きな影響を受けることになります。私は摂津国川辺郡伊丹郷町(現:兵庫県伊丹市)を主な対象地域としていますが、伊丹郷町の基幹産業である酒造業は、19世紀半ばには大きな衰退を見せます。町の基幹産業が危機に陥ったとき、町役人や領主はいかにこの問題に対処するか、という点に着目し、町政組織の転換や町役人の性格変化、酒造政策の模索や町における金融活動のあり方を明らかにしています。在郷町研究は1960年代以降、流通・経済的観点から進められ、また町運営に関する研究も蓄積されていますが、両者の関係性やその実態については、在郷町惣町を

対象にして十分に明らかになっていないという背景があります。

また、伊丹郷町を対象地域とする際、領主が摂家の近衛家であることも重要な点です。伊丹郷町では、近衛家が主導する金融活動や酒造政策が展開され、領知の少ない公家にとって、在郷町を支配することで得られる経済的利点は大きかったと考えられます。近年、朝廷・公家研究は盛んに行われていますが、近世における公家の家領経営に関してはほとんど研究がなく、個別領主としての公家像について改めて考える必要があります。

もう一つの研究活動として、歴史資料の調査および保全・活用にかかわる実践を人文学研究科地域連携センターにおいて進めています。日常的に、さらに災害時においてより急速に地域の歴史資料が失われている現状の中で、兵庫県内の各自治体と連携しての史料調査やそれらを担う人材育成、歴史資料ネットワークと協力しての史料保全のための全国的なネットワーク構築を行っています。

平井晶子、床谷文雄、山田昌弘編著『出会いと結婚』 日本経済評論社 2017年12月



曲がり角にある日本の結婚、そのどこが新しいのか、何が世界的に共通する変化で、どこが日本的なのか。フランス・イタリアの最新事情から、アジア7か国との比較から、日本の今が見えてきます。〈比較〉と〈歴史〉を軸に、社会学、歴史学、法学、人類学などの専門家が〈結婚のはじまり〉を考える学際的な1冊です。(平井晶子)

出口雄一、神野潔、十川陽一、山本英貴編『概説 日本法制史』 弘文堂 2018年3月



国家や共同体のなかで法や規範がどのように形成され運用されたのかをテーマに社会科学の知に触れられる本書は、高校までの日本史と大学における社会科学の専門教育をつなぐ大学初学向けの教科書として編集されました。グローバル化のなかでかえって重要性を増す歴史、その重みを味わえるよう古代から現代までを見通せる内容になっています。(平井晶子)

C. Carey, I. Giannadaki, and B. Griffith-Williams eds. *Use and Abuse of Law in the Athenian Courts*. Brill. 2018年10月



本書は、2013年4月にロンドン大学で開催された国際学会の成果をもとに編まれたものである。古典期アテナイにおいて、法というものは、司法の実践や思考、言論の中で実際にはいかに利用され、あるいは乱用・濫用されていたのか。この問題を各国の専門研究者が多様な視点から論じている(全18章)。佐藤は、"Use and Abuse of Legal Procedures to Impede the Legal Process"を執筆し、司法制度を利用した訴訟遅延戦略の実態と変化について論じた。(佐藤昇)

都市史学会編『日本都市史・建築史事典』 丸善出版 2018年11月



本事典は、集落や町並み、城下町といった日本における人々の集住の仕方を「都市」と捉え、それと建築の歴史を一体として扱い、総覧できるように、目指されたもので、藤田は、「第9章 歴史地理学」の編集を任された。見開き2ページの中項目は12を設定し、「資料としての絵図」など大きく3つに分け、そのうちの2項目と本章冒頭の「概説」を担当した。歴史地理学自体はマイナーとは言え、幸いに売れ行きも好調で、気をよくしている。(藤田裕嗣)

仁藤敦史編著『古代文学と隣接諸学3 古代王権の史実と虚構』 竹林舎 2019年1月



5世紀から11世紀まで、古代史を王権という視角から通観し、最新の成果20篇を収録した論文集。古市「五世紀の王権」では、制度的視角から王権の成熟度を測ろうとする近年の研究動向を批判し、『古事記』『日本書紀』をはじめとする編纂史料を解釈する新たな方法論に基づき、中央支配者集団と地域社会の関係をふまえた王権論の確立の必要性を提唱する。(古市晃)

小池登、佐藤昇、木原志乃編『『英雄伝』の挑戦—新たなプルタルコス像に迫る』 京都大学学術出版会 2019年2月



本書は、広範な読者に恵まれながら、長らく専門研究の対象とはされて来なかったプルタルコス『英雄伝』を、歴史、哲学、文学、各々の視点から専門的に分析したものである。9編の個別論文を通じて、全体として「挑戦者としてのプルタルコス」像を描き出そうとしている。佐藤は共編者を務めた他、「第3章:陶片追放と民衆の妬み」を執筆し、有名な陶片追放制度を手掛かりとして、作家がいかに過去を利用し、いかに同時代に配慮していたのかについて分析を行った。(佐藤昇)

藤澤潤『ソ連のコメコン政策と冷戦—エネルギー資源問題とグローバル化』 東京大学出版会 2019年2月



冷戦期のソ連・東欧諸国にとって、エネルギー資源の調達は最重要問題の一つでした。ソ連は資源大国でしたが、東欧諸国の増加し続けるエネルギー需要を満たし続けることは困難でした。そこで、ソ連・東欧諸国は域内経済協力に加えて中東産油国から石油を輸入することで、この問題に対処しようとした。本書は、第一次石油危機前後のコメコン内の議論を中心に、このエネルギー資源問題をめぐるソ連・東欧関係を分析したものです。(藤澤潤)

宮下規久朗『そのとき、西洋では一時代で比べる日本美術と西洋美術』 小学館 2019年2月



古代から現代まで、「同時代性」という観点から、時代ごとに西洋美術と日本美術を比較。時に不思議なほどの類似点を持ち、時に対照的な展開を見せる、また、時に影響し合い、時に遠く隔たる両者の歴史の在り様、そのダイナミズムを、独自の切り口によるテーマにそって明らかにした。それにより、個別に見ていただけではわからない、人の営みとしての美術の奥深さや豊かさが見えてくる。美術についてのグローバルな理解を追究する一冊。(宮下規久朗)

古市晃『国家形成期の王宮と地域社会—記紀・風土記の再解釈』 塙書房 2019年3月



日本列島における古代国家の形成過程を、5・6世紀を中心に検討した論文集。新稿3篇、既発表論文16篇を収録。近年では後世の造作の所産として敬遠されることの多い『古事記』『日本書紀』などの編纂史料を再検討し、王宮と地域社会のありようから倭国の支配構造の展開過程の解明を試みた。5世紀の倭王権が従来指摘されるほど専制的ではなく、王族と豪族の境界は曖昧だったこと、地域社会の勢力も半ば自立的であったことを指摘し、倭王を中心とする専制的支配機構は6世紀、朝鮮半島諸国との通交の再編を迫られる過程で生じたことを主張した。(古市晃)

藤井勝、平井晶子編『外国人移住者と「地方的世界」—東アジアにみる国際結婚の構造と機能』 昭和堂 2019年3月



昨年度退官された藤井勝先生を中心に社会学研究室で行ってきた東アジアの国際結婚についての調査研究をまとめた1冊です。近年、日本、韓国、台湾で急増している国際結婚について、3か国で共通のアンケート調査を実施し、分析した初の著作です。国際結婚の受け入れ地域だけでなく、東南アジアや中国といった国際結婚妻の送り出し地域についてもフィールドワークを行い、双方の現状、両者の結びつきも論じています。移民受け入れの議論が進む今日、まずはその実態を知ることが不可欠です。本書がその一助となれば幸いです。(平井晶子)

田中雅一、松嶋健編『トラウマ研究2 トラウマを共有する』 京都大学学術出版会 2019年4月



京大人文科学研究所の共同研究の内容がまとめられたもので、2018年11月に出版された『トラウマ研究1 トラウマを生きる』の続刊です。ホロコースト、カンボジア内戦、日本による植民地支配、在韓被爆者、パレスチナ問題などの歴史に関わって、語り継がれていく証言のあり方が描かれます。酒井は紛争経験者の証言における笑いとユーモアというテーマで一章を執筆しています。(酒井朋子)

文学部同窓会「文窓会」主催 〈新入生歓迎ティーパーティー〉

毎年恒例の「新入生歓迎ティーパーティー」(文窓会主催)は、4月17日(水)午後3時30分から、文学部A棟1階の学生ラウンジ・学生ホールで催されました。軽食と飲み物が用意された中央テーブルの周りには開始前から瑞々しい笑顔が溢れ、まだかまだかと期待が高まるなか、文学部長の奥村弘先生と文窓会会長の武藤美也子さんの挨拶でパーティーが始まりました。文学部生は、学すべき専門を1年次の12月頃までに自ら決め、2年次から各専修に所属することになっています。この催しは、入学を祝うだけでなく、教員や先輩たちと直に話をする場を設けることで、専修決定の一助にしてく

らうことを目的とするものです。サンドイッチやケーキなどを手に新入生たちは賑わしく、それぞれ気になる専修のブースを巡り、くつろいだ雰囲気の中、言葉を交わし合います。少人数教育を旨とする文学部における教員と学生の近しさをたっぷり味わう初めての機会になったのではないのでしょうか。今年は新入生のほとんど全員が参加し、留学生も多く顔を見せていました。楽しみに問う姿、熱く語る姿、眼を輝かせじっと耳を傾ける姿が散見され、しばしばあがる歓声にリズムを刻まれたパーティーはあっという間に、名残惜しくも終了したのでした。(中畑)

インターナショナル・アワー

文学部では交換留学やKOJSP(神戸オックスフォード日本学プログラム)など神戸大学に在籍している留学生を対象に留学生同士や文学部生との交流、あるいは日本文化に親しむのを目的として、インターナショナル・アワーを開催し、様々な企画を行っています。今年度も、秋はオープニング茶話会にはじまり、中庭での焼き芋大会、冬はクリスマス会、日本美術を学ぶ会、春には山口誓子記念館での茶道体験、

法隆寺へのバス旅行(冒頭集合写真参照)、いちご狩りといった季節ごとのイベントを楽しみながら互いに交流を深めました。学内外で日本文化に触れるこの機会を楽しみにしている留学生も多く、今後も新しいイベントを企画して日本文化に触れる機会や授業以外での親睦の機会が増えるようにしていきたいと思ひます。



「MANGA」一人文学研究の新展開—

2019年3月2・3日に、神戸大学文学部・大学院人文学研究科創立70周年記念事業キックオフシンポジウムとして「MANGA」一人文学研究の新展開—を開催しました。

「マンガが私たちの現在を覆いつくしているにもかかわらず、その反面でマンガは捉えにくく、曖昧で散漫であり、様々な境界線を越えてあらゆる領域へと拡がっている」という認識から、このような曖昧で脱境界的なマンガを「MANGA」と呼び、その諸相に人文学の様々な側面からアプローチすることでマンガに対する新たな知見を得るとともに、人文学研究の新たな展開を探ることを目的として今回のシンポジウムが行われました。

2日は神戸大学出光佐三記念六甲台講堂において、竹宮恵子国際マンガ研究センター長（京都精華大学元学長）、青木保国立新美術館館長（元文化庁長官）による基調講演、王向華香港大学現代言語文化学部准教授、油井清光人文学研究科教授による講演が行われ、その後、前川修人文学研究科教授の司会で4人の講演者によるパネルディスカッションが行われました。この1日目のシンポジウムでは、文化としてのMANGAの国際展開、社会とマンガとの接続など巨視的な視点から議論が展開されました。

翌3日は、神戸大学人文学研究科を会場とし、4つのセッションからなるシンポジウムを行いました。人文学研究の多様な領域から、MANGAの多様性を考えることが試みられました。

セッション1では、「日本美術史の中のマンガ・アニメ」をテーマとし、日本絵画とマンガ・アニメの共通点と差違がどこにあるかという問いをめぐって、苦名悠大阪大谷大学文学部講師による「中世絵画と「漫画」—制作動機の見点から—」などの発表が行われました。

セッション2では、マンガ・アニメに見られるアジア的なものの表象の分析をとおして、戦後日本におけるアジアへの眼差しの有り様を捉え直すことが試みられ、秦剛北京外国語大学北京日本学センター教授による「東映映画の『西遊記』がどんな孫悟空を作ったか」などの発表が行われました。

セッション3では、「マンガとしての映像／映像としてのマンガ」をテーマとし、映像（映画やアニメーション）とマンガがデジタル化されつつある現在の三者の関係、相互作用をめぐって、渡邊大輔跡見学園女子大学文学部講師による「可塑的視覚メディアとしてのマンガと映画」などの発表が行われました。

セッション4では、神戸大学と京都精華大学が共同制作したアスベスト被害と予防を焦点としたマンガ『石の綿』とイタリアのアスベスト被害を描いたマンガ『Eternit. Dissolvenza in bianco』の制作に関わったマンガ家・研究者らに加え、すがやみつる京都精華大学マンガ学部教授を報告者とし、フォーラム形式で社会的義務を負うマンガとしての「機能マンガ」の可能性と課題の追求がなされました。

本シンポジウムは、油井教授を中心として進められてきた共同研究「日本サブカルチャー研究の世界的展開」、『石の綿』出版に結実した松田毅人文学研究科教授と竹宮恵子国際マンガ研究センター長を中心に進められてきたプロジェクトなど、人文学研究科のマンガ、ポップカルチャー研究の成果のひとつであると共に、人文学研究を新たに展開していくための出発点であるとも言えます。今後さらなる研究の広がりや深化を目指して検討を進めていきたいと考えています。

このイベントの内容は、書籍にまとめて刊行される予定で、現在準備が進められています。

（所属・肩書きは開催時のものです）



大連での「哲学・日本思想」講義

嘉指 信雄

まだ退職して日が浅いのですが…、近況報告を、というご依頼なので、最近のことを少し——五月下旬から六月にかけて大連理工大学に行って参りました。大連は、満鉄本社や旧ロシア人街などでも知られる歴史の古いところですが、今は人口六百万の大都市となり——「中国では小さな都市」というのがジョークのようですが——高層ビル群と古い町並みのコントラストが激しく、大きく変貌した中国を感じさせられます。

大連は三回目でしたが、今回は、第九回東アジア応用倫理・比較思想会議に参加した後、一人残って、客員教授として英語での講義を三回担当。受講生は約二十名で、科学技術の倫理などを研究テーマにしている哲学科の院生たち。初めてということもあり、日本思想（道元／もののはれ論）、環境問題（石牟礼道子）、核問題（高木仁三郎）をテーマにしたパワーポイントを用意して行ったのですが、前日に院生数人とカフェで話をしてみると、英語に慣れていない学生も多いことが分かり、文学的表現の多い道元と『苦海浄土』はまたの機会にして、ハリリの『ホモ・デウス』と京都学派入門に変更。午前九時開始で、休憩・質疑応答を入れて約二時間。日本と同様、修士の学生は必ずしも研究者志望ではなく、関心の方向も程度も様々な

で、なかなか難しいものがありました。ゆっくりと、はっきりと英語を話すように努めたせいもあってか、初回の試みとしては、まずまずの反応だったと思います（I hope…）。

ただ、三木清の『技術哲学』（一九四二年）に興味をもった学生の質問に対して、思わず中国で講義していることは忘れてしまい、京都学派によるマルクス史観への批判的応答——「夜ふけまで又マルクスを論じたりマルクスゆえに寝（い）ねがてに」という西田幾多郎の歌でも知られる——を丁寧に説明しようとしている自分にふと気づいて、いささか言いよどむ、といったこともありました。微妙なところですが、改めて「京都学派左派」を読み直してみる機縁にもなりそうです。

また、特別講義の位置付けがよく分からず、学生にとって負担ではと懸念されたのですが、「外部講師による英語の特別講義を年間三十回受講することが必修」とのこと。これはなかなか良い制度だと思いました。次回は、秋に二週間ほど出かける予定です。わたし自身にとっては、神戸大の現代日本プログラムで担当していた留学生向けクラスの出前版のような感じですが、院生が発表する演習クラスも設けてもらい、できるだけ望ましい形を探って行きたいと思っています。

神戸大学名誉教授（哲学・倫理学 2019年3月退職）

退職後の日々

釜谷 武志

3月末に定年退職して数か月が過ぎました。退職前は、ドイツ文学者の池内紀氏のように夜明け前後に起き出して、10時ごろまで仕事をして軽い食事を取った後、午後には気ままに読書をする（『記憶の海辺』）といった生活をぼんやりと思いついていました。しかし生来の怠け者で朝寝坊ゆえ、それもかなわず、午前中はゆっくりして、逆に午後から仕事を始めるようになりました。

いくつか続けている仕事のうち、昨年度から交付を受けている科研の共同研究について報告いたします。内容は『宋書』楽志二以降を対象とするものです。『宋書』は、唐代の次の宋代ではなく、唐以前の南北朝、南朝宋の正史です。そのなかで音楽にかかわる分野が「楽志」で、楽志一は、上古から南朝宋までの音楽について沿革を述べ、楽志二から四は漢代から南朝宋までの雅楽、俗楽そして舞曲と軍楽の歌詞を記載しています。楽志一は、すでに十数年前に同じく科研で訳注を公表しましたので、今度は楽志二から四のうちの雅楽の歌詞を対象にして、訳文と詳細な注釈を作成しているところです。雅楽とは具体的には、皇帝にとっての最大の祭祀である天神地神、祖先神の祭祀で神おろしをする際に演奏する音楽、それと宮中の宴席での音楽

です。公的な性格の強い場で披露される雅楽の歌詞は、率直に言って千篇一律で面白くないものです。ではなぜそんな作品を対象とするのか。それは当時を代表する文人たちが制作にたずさわっているからです。個人の感情を述べた通常の詩を創作する詩人が、祭祀や儀式的歌詞を制作する時に、いかなる態度で制作に向かったのか、それらの間にどういった共通性があるのかを、考えたいと思っています。

皇帝の祖先神を祭る歌である「宗廟歌」をこまかく見ていくと、用いられている語彙の多くが『詩経』の「頌」にもとづくことが明らかになりました。頌は先秦の殷、周といった王朝や魯国の祖先祭祀においてうたわれた歌です。後世の文人は制作に当たって、古典籍に載る類似した場で作られた歌をもとに、それらの語彙をちりばめるといった創作方法を採用したことが分かってきました。

人口に膾炙した詩句ではありませんが、作者が規範を守りつつかには独創性を出そうかと腐心している過程をさぐり、創作行為を少しでも明らかにすることができればいいなと考えています。

神戸大学名誉教授（中国文学 2019年3月退職）